



Red Hat OpenStack Platform 17.1

Service Telemetry Framework リリースノート 1.5

Service Telemetry Framework 1.5 のリリースについて

Red Hat OpenStack Platform 17.1 Service Telemetry Framework リリース ノート 1.5

Service Telemetry Framework 1.5 のリリースについて

OpenStack Documentation Team
Red Hat Customer Content Services
rhos-docs@redhat.com

法律上の通知

Copyright © 2024 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

このドキュメントでは、Service Telemetry Framework の本リリースにおける主な機能、機能拡張、および既知の問題を概説します。

目次

多様性を受け入れるオープンソースの強化	3
RED HAT ドキュメントへのフィードバック (英語のみ)	4
第1章 SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK リリースの概要	5
1.1. 製品サポート	5
第2章 SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK のリリース情報	6
2.1. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.5.0	6
2.2. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.5.1	6
2.3. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.5.2	7
2.4. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.5.3	8
2.5. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.5.4	10
2.6. ドキュメントの変更	11

多様性を受け入れるオープンソースの強化

Red Hat では、コード、ドキュメント、Web プロパティにおける配慮に欠ける用語の置き換えに取り組んでいます。まずは、マスター (master)、スレーブ (slave)、ブラックリスト (blacklist)、ホワイトリスト (whitelist) の 4 つの用語の置き換えから始めます。この取り組みは膨大な作業を要するため、今後の複数のリリースで段階的に用語の置き換えを実施して参ります。詳細は、[Red Hat CTO である Chris Wright のメッセージ](#) をご覧ください。

RED HAT ドキュメントへのフィードバック (英語のみ)

Red Hat ドキュメントに対するご意見をお聞かせください。ドキュメントの改善点があればお知らせください。

Jira でドキュメントのフィードバックを提供する

問題の作成 フォームを使用して、Red Hat OpenStack Services on OpenShift (RHOSO) または Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) の以前のリリースのドキュメントに関するフィードバックを提供します。RHOSO または RHOSP ドキュメントの問題を作成すると、その問題は RHOSO Jira プロジェクトに記録され、フィードバックの進行状況を追跡できるようになります。

問題の作成 フォームを完了するには、Jira にログインしていることを確認してください。Red Hat Jira アカウントをお持ちでない場合は、<https://issues.redhat.com> でアカウントを作成できます。

1. 次のリンクをクリックして、**問題の作成** ページを開きます (**問題の作成**)。
2. **Summary** フィールドと **Description** フィールドに入力します。**Description** フィールドに、ドキュメントの URL、章またはセクション番号、および問題の詳しい説明を入力します。フォーム内の他のフィールドは変更しないでください。
3. **Create** をクリックします。

第1章 SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK リリースの概要

本リリースでは、Service Telemetry Framework (STF) に新機能を追加し、STF に特有の問題を解決しました。

STF は他の Red Hat 製品のコンポーネントを使用しています。これらのコンポーネントのサポートに関する具体的な情報は、<https://access.redhat.com/site/support/policy/updates/openstack/platform/> および <https://access.redhat.com/support/policy/updates/openshift/> を参照してください。

STF 1.5 は、デプロイメントプラットフォームとして OpenShift Container Platform バージョン 4.12 および 4.14 と互換性があります。

1.1. 製品サポート

Red Hat カスタマーポータルでは、Service Telemetry Framework のインストールと設定をガイドするリソースを提供しています。カスタマーポータルでは、以下の種類のドキュメントをご利用いただけます。

- 製品ドキュメント
- ナレッジベースのアーティクルおよびソリューション
- テクニカルブリーフ
- サポートケース管理
カスタマーポータルには <https://access.redhat.com/> からアクセスしてください。

第2章 SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK のリリース情報

この Service Telemetry Framework (STF) リリースのサポート期間中にリリースされた更新に関する注意事項は、各更新に関連するアドバイザリーテキストに記載されています。

2.1. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.5.0

このリリースノートでは、Service Telemetry Framework (STF) の本リリースをインストールする際に考慮すべき拡張機能および削除された機能を説明します。

本リリースには、以下のアドバイザリーが含まれています。

[RHEA-2022:8735-01](#)

Service Telemetry Framework 1.5.0 - コンテナイメージ用のコンポーネントのリリース

2.1.1. リリースノート

このセクションでは、推奨事項や STF の重要な変更点など、リリースに関する重要な情報をまとめています。お使いのシステムに最大限の効果をもたらすために、以下の情報を考慮する必要があります。

[BZ#2121457](#)

STF 1.5.0 は OpenShift Container Platform 4.10 をサポートします。これまでの STF のリリースは、延長サポートの終了が近づいている OpenShift Container Platform 4.8 に限定されていました。OpenShift Container Platform 4.10 は、2022 年 11 月までのフルサポートと 2023 年 9 月までのメンテナンスサポートを備えた延長更新サポート (EUS) リリースです。詳細は、[Red Hat OpenShift Container Platform ライフサイクルポリシー](#) を参照してください。

2.1.2. 非推奨の機能

このセクションには、サポートされなくなった機能、または今後のリリースでサポートされなくなる予定の機能を記載します。

[BZ#2153825](#)

sg-core アプリケーションプラグイン **elasticsearch** は、STF 1.5 で非推奨になりました。

[BZ#2152901](#)

prometheus-webhook-snmp の使用は、STF 1.5 で非推奨になりました。

2.1.3. 削除された機能

[BZ#2150029](#)

STF と Gnocchi を一緒に使用方法を説明する STF ドキュメントのセクションが削除されました。Gnocchi の使用は、自動スケーリングでの使用に限定されています。

2.2. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.5.1

このリリースノートでは、Service Telemetry Framework (STF) の本リリースをインストールする際に考慮すべき拡張機能および削除された機能を説明します。

本リリースには、以下のアドバイザリーが含まれています。

[RHSA-2023:1529-04](#)

Service Telemetry Framework 1.5.1 - コンテナイメージ用のコンポーネントのリリース

2.2.1. リリースノート

このセクションでは、推奨事項や STF の重要な変更点など、リリースに関する重要な情報をまとめています。お使いのシステムに最大限の効果をもたらすために、以下の情報を考慮する必要があります。

BZ#2176537

STF 1.5.1 は OpenShift Container Platform 4.10 および 4.12 をサポートします。これまでの STF のリリースは、延長サポートの終了が近づいている OpenShift Container Platform 4.8 に限定されていました。OpenShift Container Platform 4.12 は、現在完全にサポートされている Extended Update Support (EUS) リリースです。2024 年 7 月までメンテナンスサポートが提供されます。詳細は、[Red Hat OpenShift Container Platform ライフサイクルポリシー](#) を参照してください。

BZ#2173856

イベントストレージが無効になっていると、Grafana のイベントデータソースが使用できないという問題があります。イベントストレージのデフォルト設定は無効になっています。データソースはアノテーションを使用しており、デフォルトでは使用できないため、仮想マシンダッシュボードには、欠落しているデータソースに関する警告が表示されます。回避策 (ある場合): 仮想マシンダッシュボードで使用可能なスイッチを使用して、アノテーションを無効にし、STF のデフォルトのプロイメントオプションと一致させることができます。

2.2.2. 機能拡張

本リリースの STF では、以下の点が強化されています。

BZ#2092544

CA の追加の証明書有効期限設定と、QDR および Elasticsearch のエンドポイント証明書を使用して、証明書の更新設定をより詳細に制御できます。

STF-559

STF の追加の SNMP トラップ配信制御を使用して、トラップ配信ターゲット、ポート、コミュニティ、デフォルトトラップ OID、デフォルトトラップ重大度、およびトラップ OID 接頭辞を設定できるようになりました。

BZ#2159464

この機能は golang 1.18 で再構築され、サポートされている golang バージョンにとどまり、将来のメンテナンスアクティビティに役立ちます。

2.3. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.5.2

このリリースノートでは、Service Telemetry Framework (STF) の本リリースをインストールする際に考慮すべき拡張機能および削除された機能を説明します。

本リリースには、以下のアドバイザリーが含まれています。

RHEA-2023:3785

Service Telemetry Framework 1.5.2 のリリース

2.3.1. バグ修正

これらのバグは本リリースの STF で修正されています。

BZ#2211897

以前は、OperatorHub.io Operators CatalogSource から Prometheus Operator をインストールしていましたが、これが Red Hat OpenShift Container Platform でのクラスター内モニタリングを妨げていました。

これを修正するために、STF のインストール中に Community Operators CatalogSource の Prometheus Operator を使用するようになりました。OperatorHub.io Operators CatalogSource から Community Operators CatalogSource に移行する方法の詳細は、ナレッジベースの記事 [Migrating Service Telemetry Framework to Prometheus Operator from community-operators](#) を参照してください。

2.3.2. 機能拡張

本リリースの STF では、以下の点が強化されています。

BZ#2138179

STF で RHOSP 16.2 を監視するために、director Operator を使用して Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) をデプロイできるようになりました。

2.3.3. 削除された機能

本リリースの STF では、以下の機能が削除されています。

BZ#2189670

一時ストレージに関するドキュメントが削除されました。実稼働環境では必ず永続ストレージを使用してください。

2.4. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.5.3

このリリースノートでは、Service Telemetry Framework (STF) の本リリースをインストールする際に考慮すべき拡張機能および削除された機能を説明します。

本リリースには、以下のアドバイザリーが含まれています。

RHEA-2023:123051-01

Service Telemetry Framework 1.5.3 のリリース

2.4.1. 機能拡張

本リリースの STF では、以下の点が強化されています。

JIRA#STF-1525

STF 1.5.3 より前のバージョンでは、Red Hat OpenShift Container Platform (RHOCP) Cluster Monitoring Operator が作成したロールベースのアクセス制御 (RBAC) プロファイルを使用していました。現在、STF はデプロイメントの一部として独自の RBAC プロファイルを管理します。STF では、クラスター上での RHOCP Cluster Monitoring が不要になり、独立した RBAC 制御インターフェイスが実現します。

JIRA#STF-1512

Ceilometer のポーリング頻度と一致させるために、Smart Gateway の収集間隔における STF のデフォルトのポーリング頻度と、**collectd** のポーリング頻度はそれぞれ 30 秒になりました。

JIRA#STF-1485

Red Hat OpenShift Container Platform (RHOCP) バージョン 4.12 以降で STF 1.5 をデプロイする場合は、RHOCP Operator の Certificate Manager のデフォルトのチャンネルが **steady-v1** になります。

RHOCP 4.10 を使用した STF 1.5 のデプロイでは、テクニカルプレビューのチャンネルが使用されるため、デプロイ手順が異なります。RHOCP をバージョン 4.13 以降にアップグレードする前に、**stable-v1** チャンネルに移行してください。

RHOCP Operator の Certificate Manager を **tech-preview** チャンネルから **stable-v1** チャンネルに移行する方法の詳細は、Red Hat ナレッジベースの記事 [Updating Service Telemetry Framework cert-manager dependency from tech-preview to stable-v1](#) を参照してください。

JIRA#STF-496

この STF リリースでは、Red Hat Cluster Observability Operator (COO) を使用する場合に STF メトリクスデータストア (Prometheus) がサポートされます。コミュニティの Prometheus Operator から Red Hat Cluster Observability Operator に移行する場合の詳細は、Red Hat ナレッジベースの記事 [Migrating Service Telemetry Framework to fully supported operators](#) を参照してください。

JIRA#STF-1277

STF のこのリリースでは、イベントをユーザー提供の Elasticsearch インスタンスに転送できます。

JIRA#STF-1224

STF が Red Hat OpenShift Container Platform (RHOCP) バージョン 4.12 から 4.14 をサポートするようになりました。

JIRA#STF-1387

この STF リリースでは、ServiceTelemetry オブジェクトの **backends.events.elasticsearch.forwarding** パラメーターを設定して、ストレージイベントを Elasticsearch インスタンスに転送するようになります。イベントのストレージバックエンドとして Elasticsearch を有効にする方法の詳細は、**Service Telemetry Framework 1.5** ガイドの [ServiceTelemetry オブジェクトの主なパラメーター](#) を参照してください。

2.4.2. 削除された機能

本リリースの STF では、以下の機能が削除されています。

JIRA#STF-1526

STF 1.5 では、RHOCP 4.12 や RHOCP 4.14 などの最新の Red Hat OpenShift Container Platform (RHOCP) Extended Update Support (EUS) リリースがサポートされます。他のバージョンの RHOCP は、EUS リリース間のアップグレードの場合にのみサポートされます。RHOCP 4.10 はサポートが終了しているため、STF 1.5.3 は RHOCP 4.10 CatalogSource には含まれていません。RHOCP のサポート対象ライフサイクルの詳細は、<https://access.redhat.com/support/policy/updates/openshift> を参照してください。

JIRA#STF-1504

STF のこのリリースでは、ログストレージバックエンドの管理に使用する Service Telemetry Operator のインターフェイスが削除されました。**amqp1** で転送されたログを Loki で保存することは、実稼働環境ではサポートされていません。

JIRA#STF-1498

この STF リリースでは、デフォルトでイベントは管理されません。Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) をデプロイすると、イベントパイプラインが無効になります。

2.4.3. 非推奨になった機能

このセクションには、サポートされなくなった機能、または今後のリリースでサポートされなくなる予定の機能を記載します。

JIRA#STF-1507

STF 高可用性 (HA) モードは非推奨になりました。

JIRA#STF-1493

observabilityStrategy パラメーターの値を **use_community** に設定して STF をデプロイしている場合は、Elasticsearch 管理が非推奨になります。**observabilityStrategy** パラメーターの値を **use_hybrid** または **use_redhat** に設定すると、Elasticsearch 管理は削除されます。

引き続き AMQ Interconnect を使用して、URL やその他のパラメーターで設定した外部 Elasticsearch で RHOSP から STF にイベントを送信し、イベント Smart Gateway がイベントに接続して保存できるようにすることもできます。

Elasticsearch のユーザー提供インスタンスと互換性のある接続を提供する方法の詳細は、Red Hat ナレッジベースの記事 [Using Service Telemetry Framework with Elasticsearch](#) を参照してください。

JIRA#STF-1531

STF UI インターフェイスの基本的な認可能ログインメソッドは非推奨となり、**OAuth** UI ログインメソッドに置き換えられました。

JIRA#STF-1097

この STF バージョンでは、Elasticsearch を使用したデプロイはサポートされていません。**sg-core** の Elasticsearch プラグインは非推奨となり、STF のダッシュボードにおける限定的なイベントの使用は削除されました。STF では、転送モデルを使用して、**sg-core** コンポーネント経由でユーザー提供の Elasticsearch インスタンスにイベントを転送および保存できるようになりました。

2.5. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.5.4

このリリースノートでは、Service Telemetry Framework (STF) の本リリースをインストールする際に考慮すべき拡張機能および削除された機能を説明します。

本リリースには、以下のアドバイザリーが含まれています。

[RHSA-2024:127788-02](#)

Service Telemetry Framework 1.5.4 のリリース

2.5.1. 機能拡張

本リリースの STF では、以下の点が強化されています。

JIRA#OSPRH-800

STF のこのリリースでは、Red Hat OpenShift Container Platform (RHOC) の非接続環境に STF をデプロイできるようになりました。RHOC 非接続環境での STF のデプロイの詳細は、**Service Telemetry Framework 1.5** ガイドの [Red Hat OpenShift Container Platform 非接続環境での STF のデプロイ](#) を参照してください。

JIRA#OSPRH-2577

STF のこのリリースでは、STF は Grafana Operator v4 ではなくコミュニティの Operator である Grafana Operator v5 から Grafana、GrafanaDashboard、および GrafanaDatasource オブジェクトを要求します。STF 1.5.4 の推奨 Grafana バージョンは Grafana Operator v5 ですが、Grafana Operator v5 のカスタムリソース定義 (CRD) が利用できない場合は、STF が Grafana Operator v4 からオブジェクトを要求できます。Grafana Operator v5 のデフォルトルートが **grafana-route** から **default-grafana-route** に変更になりました。Grafana Operator の移行の詳細は、Red Hat ナレッジベースソリューション [Migrate from Grafana Operator v4 to v5](#) を参照してください。

JIRA#OSPRH-2140

以前は、コミュニティの Operator Prometheus Operator からサポート対象の Cluster Observability Operator に移行するときに、STF が Prometheus の静的ターゲットバージョン、つまりバージョン 2.43.0 を使用していました。

STF のこのリリースでは、**observabilityStrategy** パラメーターの値を ServiceTelemetry オブジェクトの **use_redhat** (デフォルト) に定義すると、Service Telemetry Operator が特定のバージョンの Prometheus を要求しなくなります。

Prometheus のバージョンが指定されていないと、STF は Cluster Observability Operator によって提供されるデフォルトのバージョンを使用します。

JIRA#OSPRH-825

STF のこのリリースでは、コミュニティの CatalogSource から Grafana Operator をインストールしてグラフを有効にすると、**graphing.dashboards.enabled** パラメーターを使用して、ダッシュボードを Grafana に自動的にロードできます。github.com/infracore/dashboards リポジトリからダッシュボードをロードする必要はありません。

2.5.2. 削除された機能

JIRA#OSPRH-3492

STF のこのリリースでは、STF UI インターフェイスに Basic 認証方法を使用できないため、認証に **oauth-proxy** インターフェイスを使用する必要があります。

2.5.3. 非推奨の機能

このセクションには、サポートされなくなった機能、または今後のリリースでサポートされなくなる予定の機能を記載します。

Service Telemetry Framework の非推奨化

このリリース以降、STF はフルサポートから非推奨となり、メンテナンスサポートに移行します。Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) 17.1 のサポートライフサイクルが終了すると、STF は Extended Lifecycle Support (ELS) に移行します。

Red Hat は、メンテナンスサポートライフサイクル中、STF 1.5 に新機能を追加しません。Red Hat は、RHOSP 17.1 のライフサイクル中に利用可能になった Extended Update Support (EUS) バージョンの Red Hat OpenShift Container Platform に対して STF のリベースとリリースを継続します。Red Hat は、引き続き重大な STF バグと CVE に対処します。

RHOSP および STF の製品ライフサイクルの詳細は、カスタマーポータル [の Red Hat OpenStack Platform サポートライフサイクル](#) ページおよび [Service Telemetry Framework ライフサイクル](#) ページを参照してください。

2.6. ドキュメントの変更

このセクションでは、Service Telemetry Framework (STF) 1.5 で提供される主要なドキュメントの更新と、新機能の追加、機能拡張、修正など、ドキュメントセットに加えられた変更の詳細を記載します。このセクションでは、新しいタイトルの追加と、リタイアまたは置き換えられたタイトルの廃止についても詳しく説明します。

表2.1 ドキュメントの変更

日付	影響を受けるバージョン	影響を受けるコンテンツ	変更の説明
2024年3月	15.4	https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openstack_platform/17.1/html-single/service_telemetry_framework_1.5/index#deploying-stf-on-openshift-disconnected-environments_assembly-preparing-your-ocp-environment-for-stf	RHOCP の非接続環境に STF をデプロイできるようになりました。
2024年3月	15.4	https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openstack_platform/17.1/html-single/service_telemetry_framework_1.5/index#setting-up-grafana-to-host-the-dashboard_assembly-advanced-features	2023年12月以降、アップストリームの Grafana Operator v4 の開発が中止となりました。代わりに Grafana Operator v5 を使用してください。
2023年11月	15.3	https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openstack_platform/17.1/html-single/service_telemetry_framework_1.5/index#creating-the-base-configuration-for-stf_assembly-completing-the-stf-configuration	イベントストレージは転送モデルを使用するようになり、デフォルトでイベント配信は無効になりました。イベント配信を有効にする手順は、Red Hat ナレッジベースソリューション https://access.redhat.com/articles/7032697 を参照してください。
2023年11月	15.3	https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openstack_platform/17.1/html-single/service_telemetry_framework_1.5/index#creating-openstack-environment-file-for-multiple-clouds_assembly-completing-the-stf-configuration https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openstack_platform/17.1/html-single/service_telemetry_framework_1.5/index#configuring-the-stf-connection-for-the-overcloud_assembly-completing-the-stf-configuration	stf-connectors.yaml テンプレートの qdr::router_id 値に、デフォルトの FQDN の代わりに短いホスト名を使用できるようになりました。デフォルトの FQDN は、QDR の古いバージョンでは長すぎる場合があります。デフォルト値の長さが 61 文字未満の場合は、現在の設定を更新する必要がありません。

日付	影響を受けるバージョン	影響を受けるコンテンツ	変更の説明
2023 年 11 月	1.5.3	https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openshift_platform/7.1/html-single/service_telemetry_framework_1.5/index#importing-dashboards_assembly-advanced-features	イベントダッシュボードのインポート手順が削除されました。デフォルトで、イベント配信が無効になりました。
2023 年 11 月	1.5.3	https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openshift_platform/7.1/html-single/service_telemetry_framework_1.5/index#creating-the-base-configuration-for-stf_assembly-completing-the-stf-configuration	enable-stf.yaml ファイルでは、Ceilometer のポーリング頻度と一致するように、 collectd のデフォルトのポーリング頻度が 5 秒から 30 秒に増加されました。関連するパラメーターは、 CollectdAmqpInterval と CollectdDefaultPollingInterval です。
2023 年 11 月	1.5.3	https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openshift_platform/7.1/html-single/service_telemetry_framework_1.5/index#creating-the-base-configuration-for-stf_assembly-completing-the-stf-configuration	enable-stf.yaml ファイルでは、STF サンプルダッシュボードで使用されない不要なエンドポイントの数を抑制するために、例として使用する Ceilometer のデフォルトポーリングスターの数が減らされました。
2023 年 11 月	1.5.3	https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openshift_platform/7.1/html-single/service_telemetry_framework_1.5/index#deploying-stf-to-the-openshift-environment_assembly-installing-the-core-components-of-stf	コマンドによっては完了するまでに時間がかかることを強調するために、STF ガイド全体で検証手順に oc wait コマンドが追加されました。
2023 年 11 月	1.5.3	https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openshift_platform/7.1/html-single/service_telemetry_framework_1.5/index#configuring-the-stf-connection-for-the-overcloud_assembly-completing-the-stf-configuration	新しいデプロイメントでは、デフォルトで QDR 接続は基本パスワード認証を使用します。設定手順が更新され、パスワード認証ステップが追加されました。

日付	影響を受けるバージョン	影響を受けるコンテンツ	変更の説明
2023年11月	1.5.3	https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openstack_platform/17.1/html-single/service_telemetry_framework_1.5/index#creating-an-alert-rule-in-prometheus_assembly-advanced-features	PrometheusRules カスタムリソースが、Cluster Observability Operator が使用する apiVersion と一致するように更新されました。以前のコマンドでは、monitoring.rhobs の代わりに monitoring.coreos.com を使用していました。
2023年6月22日	1.5.2	https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openstack_platform/17.1/html-single/service_telemetry_framework_1.5/index#configuring-the-stf-connection-for-the-overcloud_assembly-completing-the-stf-configuration	クラウド設定の AMQ Interconnect トピックパラメーターとトピックアドレスの詳細。
2023年6月22日	1.5.2	https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openstack_platform/16.2/html/service_telemetry_framework_1.5/index	STF で RHOSP 16.2 を監視するために、director Operator を使用して Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) に関するセクションを追加しました。
2023年3月30日	1.5.1		STF ドキュメントから「非標準ネットワークポロジへのデプロイメント」セクションを削除しました。推奨事項は不要で、不正確である可能性があります。
2023年3月30日	1.5.1	https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openstack_platform/17.1/html-single/service_telemetry_framework_1.5/index#configuration-parameters-for-snmpttraps_assembly-advanced-features	「SNMP トラップとしてアラートを送信」セクションに STF 1.5.1 で使用可能な追加の設定パラメーターが追加されました。Prometheus Alerts からの SNMP トラップ配信用に ServiceTelemetry オブジェクトを設定するための詳細情報と例が記載されています。

日付	影響を受けるバージョン	影響を受けるコンテンツ	変更の説明
2023年3月30日	1.5.1	https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openstack_platform/17.1/html-single/service_telemetry_framework_1.5/index#proc-updating-the-amq-interconnect-ca-certificate-assembly-renewing-the-amq-interconnect-certificate	tripleo-ansible-inventory.yaml パスが更新され、RHOSP 13 および 16.2 デプロイメントの正しいパスに一致するようになりました。
2022年12月1日	1.5		STF での Gnocchi の使用に関するセクションを STF ドキュメントから削除しました。自動スケールリングには Gnocchi のみを使用できます。